

氏 名(本 籍)	大 谷 信 介 (神奈川県)		
学 位 の 種 類	博 士 (社 会 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,054 号		
学位授与年月日	平成 7 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	社 会 科 学 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	現代都市住民のパーソナル・ネットワーク ～北米都市理論の日本的解読～		
主 査	筑波大学教授	駒 井	洋
副 査	創価大学教授	越 智	昇
副 査	筑波大学助教授	樽 川	典 子
副 査	筑波大学講師	博士(社会学)	若 林 幹 夫

論 文 の 要 旨

従来の社会学の研究方法としては、集団を基礎的単位とする「集団パースペクティブ」が有力であった。それにたいし、近年個人の自由意志による結合を重視しながら個人を基礎的単位とする「ネットワーク・パースペクティブ」が都市社会学の分野で台頭し、世界的に大きな影響力を与えはじめている。このパースペクティブはとりわけ北米で発展してきたものであるため、北米以外の社会にこの方法を適用する際には社会的文脈を考慮した慎重な吟味が要請される。本論文の目的は、日本の中国四国地方の住民にたいする調査結果を北米のいくつかの調査結果と比較しながら、ネットワーク・パースペクティブの妥当性を検討し、この方法のさらなる発展をはかろうとすることにある。

本論文は、序章、1－7章、結章から構成されている。

序章は本論文の導入部分である。都市社会学の理論構成は、その背景としての都市現実により規定されている。ところが、これまでの日本の都市社会学にあっては、ある理論の基盤である都市現実を理解することなく理論の直輸入的適用がなされがちであったという問題提起がなされる。

「パーソナル・ネットワーク研究の台頭」と題される題1章は、ネットワーク理論の学説史的整理をしている。この理論は社会人類学に端を発するものであり、社会的ネットワークの個人にたいする構造的制約を強調する立場と、それを個人の社会的資源として位置づける立場とに大別することができる。前者の代表者としてはフィッシャーを、後者のそれとしてはボワセベンを、さらに数理モデルの提唱者としてミッチェルをあげることができる。

第2章「日本の人間関係研究の系譜と問題点」は、日本の社会学的研究を、①伝統的家族・村落社

会学、②家族社会学、③産業社会学、④都市社会学に大別して、社会関係が集団を媒介としながら分断的・個別的に分析されてきたことをあきらかにし、個人を中心とする横断的・総合的な分析の必要性が強調される。第3章は「ネットワーク測定方法と調査概要」と題され、とくにネットワークの範囲の確定と調査票のワーディングなど調査方法論上の問題点の整理を中心としながら、中国四国住民にたいする3調査の方法が提示される。

このような準備のうえにたって、第4章から第6章は中国四国と北米のネットワークの特質の共通性と差異性を解明している。第4章は「親しい人」を焦点とし、第5章は属性別、第6章は都市化との関連における比較にもとづく考察がなされる。

第4章「日本のパーソナル・ネットワークの特徴」では、北米と比較して、①親戚ネットワークが弱い、②兄弟姉妹の紐が強い、③近隣ネットワークが強い、④職場ネットワークが強いという傾向があきらかにされる。第5章「属性とパーソナル・ネットワーク」では、性別・年齢・学歴・収入・結婚状態の各属性ごとのネットワーク形成について、中国四国と北米でほぼ同じ傾向がみられるという事実が述べられる。第6章「都市化とパーソナル・ネットワーク」でも、都市化の程度を人口規模によって定義しながら、親戚ネットワークの衰退と友人ネットワークの興隆や目的に応じて限定的に結ばれる〈単一送信型ネットワーク〉の増大は中国四国と北米におおむね共通であるという発見が提示される。

属性および都市化との関連におけるネットワークの中国四国と北米の共通性と顕著な対照をなすものが、〈下位文化理論〉の妥当性であり、それは第7章「下位文化理論の日本的文脈からの解説」で展開されている。フィッシャーの下位文化理論によれば、都市化が人びとの選択の範囲を拡大させるためネットワークの同質結合は都市化により高まるとされている。これについて、横浜市におけるボランティアアソシエーションは階層的に異質な会員から構成されていること、また中国四国で都市化が進むほどもっとも親しい人の出身地も多様化することから、日本では都市化がネットワークの異質結合を増大させるという逆の現象が存在していることが指摘され、北米との差異が主張されている。

結章は「パーソナル・ネットワーク研究の射程」と題されており、本論文の知見の要約と結論の部分にあたる。第7章でみた同質結合の強調は、北米社会の基本的特質としてのさまざまな領域におけるセグリゲーションの存在がコミュニティレベルでの同質性を成立させているという北米の都市現実を反映したものであり、この意味で〈下位文化理論〉は普遍的妥当性をもたないといえるのである。展望としては、因習にとらわれない意識をもつ者に〈まざりあった紐帯〉すなわち異質結合がみられるという調査結果から、都市の文化的創造性にたいして異質結合が果たす役割が注目されるに至る。

審 査 の 要 旨

本論文は、①今後大きな貢献をなすとおもわれる社会学の新しい方法としてのネットワーク論に関する先駆的業績であること、②北米における学説史的展開を十分に消化していること、③日本において実地調査をたんねんに実施しその結果を北米の諸調査結果と対照していること、④結論として北米

の文脈から得られた理論の修正をおこなっていることなど、既存の蓄積を踏まえながら独創的論述をおこなっている点は高く評価できる。以下これらの諸点について順次述べる。

①については、現代の基本的価値としての自由という観点からみるばあい、従来の支配的方法であった集団パースペクティブが人間のとり結ぶ社会的結合の理解には不十分であることが強調されるべきである。それにくわえてわが国の学会においては、ネットワーク論についての本格的・体系的な業績がいまだ現れていないため、本論文の意義は大きい。

②については、北米における留学経験を踏まえて、基本的研究はいうまでもなく重要とおもわれる論文を悉皆的に網羅しながら紹介している努力を多とすべきである。とくにネットワーク論の理論的代表者であるフィッシャーとは個人的に接触する機会があってその学説を十分に摂取し、また現在の代表的研究者のひとりであるウェルマンとは親交を結んで情報チャンネルを確立したなどの経緯がそれを助けている。

③については、日本で著者が実施した松山調査（標本数396）、四国内4県庁所在地を対象とする四国調査（標本数2000）、人口規模の異なる5都市を対象とする中四国調査（標本数2500）の本格的3調査の結果のほか、著者が参加した横浜市緑区における自主活動団体代表者を対象とする調査（標本数367）も援用されている。また北米については、フィッシャーによる北カリフォルニア・コミュニティスタディ（標本数1050）、ウェルマンによるトロント・イーストヨーク調査（標本数845）、ナショナル・オピニオン・リサーチセンターによるアメリカGSS調査（標本数2044）の調査結果が駆使されている。このようにデータのには危なげのない論文となっている。

④については、とりわけフィッシャーの都市化が同質結合を高めるという命題にたいして日本のデータによって疑問を呈示しながら、異質結合の積極的意義にまで考察を進め今後のネットワーク論の展開の方向を示唆していることは評価されてよい。

ただし、本論文については「集団パースペクティブ」と「ネットワーク・パースペクティブ」の差異、「同質結合」と「異質結合」の差異についての概念規定に若干甘さが残り、「都市」の本質についての議論もいささか不十分であり、さらに実証データについてはやや量的側面に偏りすぎているきらいがあるが、これらは本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。